

私たちが政治家を“好き”と思うとき

香山リカ 著

第1部 講演「私たちが政治家を“好き”と思うとき」 05

- 1 自分の「立ち位置」がわからない 05
- 2 変わる精神疾患 — 臨床の現場から 10
- 3 不安に満ちた社会生活の中で 17
- 4 抜け落ちる社会への視点 22
- 5 「私と小泉さんの約束」 28
- 6 理屈を超える安心への渴望 37

第2部 対談 香山リカ×山口二郎 46

- 1 なぜ矛盾が気にならないのか 46
- 2 内向き志向とリスク社会 52

第3部 質疑応答 59



この「ACADEMIA JURIS BOOKLET シリーズ」は、北海道大学大学院法学研究科附属高等教育研究センターが開催したシンポジウム・講演会等の内容を記録するものです。

本号には、二〇〇六年十月二十日に北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟二〇三室で行われた、学術創成研究プロジェクト企画講演会「私たちが政治家を『好き』と思うとき」の内容をおさめました。

私たちが政治家を「好き」と思うとき

司会(山口二郎) 皆さん、こんばんは。お忙しい中、ようこそ講演会においでくださいました。

私は、コーディネーターを務めます北海道大学公共政策大学院教授の山口二郎です。

今日は、帝塚山学院大学教授の、というより、テレビでおなじみの精神科医であり、文化百般にわたって興味深いコメントを連発され、多くの著作もある香山リカさんをお招きして講演会を企画しました。

実は、私のゼミで、香山さんの近著である『テレビの罠——コイズミ現象を読みとく』(ちくま新書、二〇〇六年)を読んだのです。私自身、現代政治について発言をする機会があるので、小泉政治というのは、政治学者がいろいろと考えても説明のつかない、わからないことがあ

まりにも多いのです。ですから、精神科の医師が見たら、今の政治家や国民の政治意識はどのように見えるのだろうか、政治学者よりもっと面白い、突っ込んだ説明をしてくれるのではないかと、直接、話を聞こうということでお招きをいたしました。

時あたかも安倍政権が発足し、北朝鮮核危機が起こって、とさまざまな動きがあるのですが、今日の講演会の趣旨は、精神医学、精神分析という方法から見ると、今の日本はどのようになっているのか考えようというものです。

これから香山さんにご講演をいただき、その後、私と香山さんの対談を行い、会場からご質問をいただく予定です。

講演に先立ちまして、香山さんのプロフィールを簡単にご紹介しておきます。一九六〇年、札幌市のお生まれで、中学まで小樽市で育ったということで、北海道に大変、縁の深い方です。東京医科大学を卒業後、精神科医になられまして、その後、政治も含めて多様な問題について多くの本を書いておられます。私が感心したのは、今年八月にNHK教育テレビで放送された「私のこだわり人物伝」という番組で、香山さんがジャイアント馬場というプロレスラーについて非常に面白い話をされていたことでした。この人は本当に幅が広いと感心した次第です。

それでは、香山さんに講演をお願いします。

第一部 講演「私たちが政治家を『好き』と思うとき」

1 自分の「立ち位置」がわからない

香山リカ 皆さん、初めまして。と言いましても、先ほど山口さんのご紹介にもありましたように、私は北海道とは非常に縁が深いのです。北海道出身であり、東京の大学を出た後に北大附属大学病院で研修医となり、精神科医として第一歩を踏みだしたのもこの北海道の地です。北大で研修が終わってからも、札幌市内の民間病院や小樽市立病院で、何年か精神科医として働いたことがあります。

今、北海道の自治体は台所事情が厳しいということで、小樽市も財政赤字が非常に大変だと東京の新聞で見ることがあります。そうした記事を読むと、赤字の大部分は小樽市立病院が生みだ

したとのことで、自分も赤字づくりの一端を担ってしまったのではないかと、今ごろになって当
時を思い出したりしています。

今日は、そのようなご縁のある北海道、特に北大で皆さんにお会いできて、とてもうれしく思っ
ています。

精神科医の私が、なぜ政治家や政治について発言しているのだろうか、皆さんの中には少し
いぶかしく思っている方もおられるかもしれません。私は大学教員であると同時に、東京の病院
で診療していて、ずっと臨床の現場にもいるのですが、そこにくる患者さんたちは、時代のいろ
いろな問題の、ある種、先端の部分を担当しているというのでしょうか、自分のアンテナで時代の
問題を鋭敏に感知してしまった人たちが多いのですね。そうした臨床の場を通じて、今の世の中
や社会に対して、いろいろと感ずることがあります。

また、私たち精神科医の仕事にとって、病氣の人を治すことがもちろん最も大切なのですが、
もう一つ重要なことがあります。それは他の内科医や外科医と少し違うところだと思えますが、
病氣の癒えた患者さんたちが戻る社会とはどんなところか、ということについても、若干、考え
なければいけないということなのです。

例えば、うつ病や統合失調症などの病気で長期休職や退職してしまったり、長期入院して帰る

家が無いなど、いろいろな事情の人がたくさんいるわけです。そういう人たちがどうやって社会復帰していくのか、あるいは社会復帰しやすい社会なのかどうなのか、ということは考えざるを得ません。あまり社会に関心がない人間でも、精神科医になれば、いやおうなく社会というものに目を向けざるを得ないという事情があります。そういうことで、私自身も診察室の中だけでなく、社会というものにかかわらざるを得なくなったという感じですよ。

私に「小泉政治とは何だったのか」ということを、ここで解き明かすことなどできないと思いますが、精神科医としての私なりの問題提起はできると思います。今日は、そうしたことを思いつくまま、順不同に話をさせていただき、その後、山口さんとやりとりしたり、皆さんとも少しやりとりしながら、特に結論が出るとは思わないのですが、考えるヒントのようなものを見つけて出していくことができればと思います。

今日の講演タイトルは「私たちが政治家を『好き』と思うとき」としました。今、私たちは政治家に対して、その人を「評価する」というよりは「なんとなく好き」とか、「なんとなく感じがいい」など、非常に情緒的、感覚的に支持するかどうかを決めてしまうところがあるのではないかと思います。そういう意味をこめて、あえて「私たちが政治家を支持するとき」ではなく、「私たちが政治家を『好き』と思うとき」とタイトルを付けたのです。

私たちが、実際に好き嫌いだけで政治家を選んだり、支持したりしているのかどうかはさておき、一応ここでは、そういう傾向があるのではないかという前提でお話をしていきます。もしそうだとしたら、なぜ、そんなことになっているのかを考えていかなければいけないと思うのです。そして、それを考えるに当たって、私が臨床の場でいろいろな患者さんたちとやりとりすることを通して見えてくる、今の社会の問題点を私なりに浮き彫りにし、そうした問題点を解消してくれる人を「私たちは好きなのではないか」という仮説のもとに、お話ししてみたいと思います。さて、それでは、私を感じている今の問題点はどんなことか、たくさんあるのですが、今日はいくつか話を絞ってご紹介したいと思います。

まず、臨床の場に来る人たちには、いろいろな立場の人がいます。主婦、会社員、フリーター、退職した人などさまざまですが、どの人も、自分の「立ち位置」と言うか、ポジションが自分でわからない、あいまい、不鮮明、という傾向があるように思います。もつとえば、自分とは何か、自分とは誰であるかということに対して、非常に漠然とした思いを持っている。一つにはそうした傾向があるような気がします。

さらに、そこから進んで「自分という個人が、今の社会の中で、非常にないがしろにされているのではないか」と受け止めている人もいます。若い人であれば、「自分の居場所がない」とか、

「自分のことを誰もわかってくれない」とか、「自分が一体、誰なのかよくわからない」といったような、昔の言葉で言えば、自分のアイデンティティーに対しての疑問を持っているというタイプの人が多いようです。

もちろん「自分って誰？」というのは、いつの時代も誰もが持ち得る問いであって、それ自体がおかしいとか病的ということではないのですが、それでも、私たちは普通、「私はこの北大の学生である」とか、「私は〇〇銀行の窓口の係である」、「私は今、子育て中の専業主婦である」などのように、何かしらこの社会の中に、自分の立ち位置のようなものを見つけています。そして、「私というのはそういう人間だ」という立ち位置を通して、銀行員であれば、銀行の他の同僚の人たち、あるいはおつきあいのある他の銀行の人たちやお客さんとの関係を持ち、さらには銀行員として、経済問題に関心を持ち、新聞でそうした経済ニュースなどが出ていると、それも自分と関係があるという、自分のポジションからだんだん発展させていって、自分というものをめぐる一つの大きな物語のようなものを紡ぎ出していくことができます。

ところが、今やそれがなかなかできにくくなっている。これは特に私が発見したことではなく、多くの人たちが問題にしてきたことで、例えば、冷戦構造の崩壊と、その後が続くいわゆる物語の崩壊、消失についても、これまでも何度となく問題にされてきました。

ただ、冷戦構造までさかのぼらなくても、ここ数年の日本において、会社中心主義が崩壊していったり、昔のように北大だからかなりのエリートで、北大生というだけで自分も自信が満々、というような時代ではなくなっています。

それはそれで結構なことで、大学の権威にすぎらず、個人の実力や能力が問われるということは、特に悪いことではないのです。しかし、私たちが普通に日常生活を送る上では、そういった依って立つような権威や自分の肩書き、会社などが、今やもう通用しない、というのは非常に大変なことです。 「肩書きや権威にすぎらずに、自分自身で勝負しろ」とか、「生身の自分で立ち向かえ」と言われても、私たちは、すぐにはそういうことができません。

そのように、ある種、物語が崩壊した中に放り出されて、「個人として勝負しろ」、「これからは生身の自分で行くのだ」と言われても、なかなか自分のポジションを見つけられない、あるいは、物語を紡ぎ出していけない、という現実があるのだと思います。

2 変わる精神疾患——臨床の現場から

これはとても面白いことに、臨床の場で見られる多くの精神疾患にも、こうした影響が非常に

よく表われています。例えば、統合失調症という病気があります。これは今では、心の病気というより脳の病気という理解がなされています。脳の中のある神経伝達物質の伝達システムに故障が生じて、それによって、いろいろな精神症状があらわれてくる。ですから、この病気がしつけや教育の問題として理解されるのは間違っているという方向で、今は理解されています。

その典型的な症状は、皆さんもよく知っているように幻覚と妄想です。幻覚の中でも、特に多いのは幻聴で、誰もいないのに声が聞こえる幻聴や妄想によって、あり得ないことがあるのだと信じこんでしまうのです。最近の患者さんの傾向を見ると、幻覚や妄想の規模が小さくなっているというか、軽いものになっています。カジュアルな妄想という誤解が生ずるかもしれません。が、いわゆる「プチ妄想」というような、とてもささやかなものになっているのです。

以前、こうした統合失調症でよく見られた症状には、血統妄想のようなものがあります。例えば、「私は○○天皇の血を引く人間である」とか、「私は実はヒトラーの末裔(まつえい)である」など、血縁関係に関する妄想を持ってしまう。

私が北大で精神科医の研修をしたのは、今からちょうど二十年前なのですが、そのころはこうした患者さんが非常に見事な血統図を描いて、「私は○○家の血筋で、○○天皇とつながっているんですよ」とか、「私の父はダレソレ、母はダレソレで、祖母は……」と、説明してくれることが

ありました。

また、同様に多かったのは誇大妄想です。自分は宇宙の法則を支配する人間だというような、非常に大きな妄想を持っている。この人たちも、「宇宙の法則とはどんなものですか」と聞くと、延々と壮大な物語を語ってくれるのです。それ自体は妄想であり、真実ではないのですが、論理として破綻していない。話として非常によくてきていて、こちらでも思わず、仕事であることを忘れて聞き入ってしまう、ということもありました。

ところが最近、こうした誇大妄想、血統妄想は非常に少なくなって、ほとんどない。今、発病している人たちにはほとんど見られません。代わりに増えているのが、非常に軽い被害妄想なのです。

例えば、「自分の隣の家の人が、夜になると大きな音を立てて、私に嫌がらせをするんですよ」とか、「電車に乗ると、同じ車両の人たちが私のことを見ている気がするのです」といったような妄想です。こうなると、妄想なのか、本当にそういうことが起きているのか、判断できない。精神科に来るよりはマンシヨンの管理人に言った方がいいのではないかと、こちらもそのあたりの判断に悩むような日常的な妄想です。

先ほどの誇大妄想や血統妄想が非常に大きな妄想だとすれば、非常に軽く、物語自体矮小化し

ていると言えるような、等身大的な、生活圏内での妄想がとて目立っています。この人たちは、病気としては、先ほどの壮大な妄想を持っている人よりは、一見、軽い感じに見えるのですが、中にはなかなか治りづらいという傾向の人もいます。

うつ病に関しても同じようなことが起きています。ここ十年ぐらい、「うつ病の軽症化」ということが盛んに言われています。うつ病は軽くなってきた。しかし、数は増えています。また、病気が軽くなることは、いいことなのですが、ただ単純に軽くなっているということではないのです。

例えば、一九九五年に、ある精神科医が「未熟型うつ病」という非常に変わった新しい概念を提唱したことがあります。この「未熟型」とは何かというと、二つの意味があります。一つは、そのうつ病になる人の性格傾向やものの考え方、また社会的規範のとり入れが非常に弱いといったような、その人自身が未熟だという意味です。

それだけですと幼稚な人のうつ病のようですが、そうではなくて、もう一つの意味は「うつ病としても未熟である」、つまり、うつ病になり切れていないという「うつ病未満」のような状態を指しています。これは、うつ病として症状が出そろっていないということなのです。

うつ病というと、気分が落ち込むだけでなく、布団から出られないとか、人込みに全く行

けなくなる、考えようとしても頭が回らないという、私たちの言葉で「制止」という症状が起きます。こうした行動が制止されてしまったように動けないという症状は非常に少なくなっています。むしろ逆に、軽い不安感や焦燥感などで落ち着きがない患者さんが多いのです。

うつ病といっても、合間には元気な時期があり、典型的なパターンでは、仕事には行けないがレジャーには行ける、そんな感じでした。しかし、それはわざとそうしているわけではなく、本当に仕事となると足がすくんでしまって、気分が悪くなり、落ち込んで冷や汗が出るという身体反応が出てしまうのです。気楽に取り組めるような趣味などは大丈夫ということなので、まわりから見ていると「この人、サボっているのでは」という疑問がわくのですが、本人はいたって真面目に悩んでいるのですね。

患者さんの中には、うつの合間に、少し気分が高揚するような軽躁状態と言われる症状が混ざってくることもあります。例えば、休んでいた会社に突然、出勤してきて、非常に元気にこうしよう、ああしようと、いろいろなプランを提案したりします。まさに、「ぬけぬけ」という感じで、絶対調で指示を出したりするので、本当によくなったのかと思いきや、次の週からバッテリー来なくなる。そうした短い周期で、細かい上がり下がりを繰り返すのが未熟型うつ病で、こうしたタイプが九〇年代の後半ぐらいから臨床の場で非常に問題になってきました。

この人たちは、一見、元気な時期もあるので、一旦、落ち込んだら、何カ月も一切何もできないというようなうつ病に比べれば、軽く見えるのですが、皆さんも想像がつくように、治療してもなかなか反応がなく、長引きやすいのです。

また、長引いているうちに、うつ病だけではなくて、会社への不満や家族への怒り、過去に体験した葛藤など、いろいろと出てきてしまつて、うつ病なのか、そうではない別の神経症なのか、医者の方もよくわからなくなつてしまつてしまうということもあります。

少し不思議なうつ病ですが、これを一体、うつ病と考えるべきなのか、それともうつに似た、何かその人の性格の問題や適応障害なのか、このことが今、看過できない問題になっています。

今年の夏に、ある研究機関が、全国の企業にアンケート調査をした結果が、新聞で大きく報じられていました。正確なデータは忘れてしまつたのですが、その中で「ここ二年間、心の病で長期休職する社員が増えているか」という質問に対し、七割近くの企業が「増えている」と回答していました。この調査は二年ごとに行われている調査で、二〇〇二年より二〇〇四年、二〇〇四年より二〇〇六年の方が、それぞれ「増えている」の回答企業が増加しているのです。

しかも、「長期休職している人たちの年齢は何歳台が多いですか」という質問に対して、七割の企業が「〇〇歳台」と答えたのですが、何歳台だと思いますか。これは新聞で話題になつたので、

ご存じの方も少なくないと思いますが、三十歳台のうつ病が非常に多いのです。

うつ病というと、これまでは中年以降の病気と考えられてきました。いろいろな意味で人生の重荷も増え、だんだんエネルギーも枯渇してくるような五十代、六十代の病気と考えられていたのですが、最近では三十代なのです。おそらくこの人たちは、従来のうつ病とは少し違い、先ほどお話ししたように未熟型の、一見、軽いが、状況に依存して症状が変動しやすいというタイプのうつだと思えます。

話が少し長くなりましたが、統合失調症にしてもうつ病にしても、今は、心の問題というよりは、むしろ脳の問題、生物学的な疾患である要素が強く、若干のストレスが多少のきっかけとしては関わっているものの、基本的には脳の失調であろうと考えられつつあります。しかし、そういうものでさえ、ある種の時代の影響というか、物語を紡ぎだせないということの影響を非常に色濃く受けています。いわんや脳の疾患ではない、いろいろな神経症や人格障害などの問題は、もつといろいろな影響を受けているわけです。

このように、何か妄想するとしても、体系立った妄想ができると、ある意味で安定するのです。それは、妄想を核とした自分の立ち位置、居場所が非常に明確になるからです。少々、誤解を招く言い方かもしれませんが、人間ははつきりした妄想ができた時ほど、ある意味で自信がわいて、

自分自身というものの存在を自己確立できるのではないか、もちろん誤った自己確立ではあるのですが、安定できるのだと、私もいろいろなケースを見ながら思ってきました。

「私はナントカ天皇の末裔である」とか、「私こそヒトラーの跡を継ぐ人間である」などと絶対的な確信を持っていると、自分で自分に対してマインドコントロールしているのに近いのかもしれないませんが、宗教的なマインドコントロールと同じような、ある種の揺るぎない確信が持てるのです。

ところが、病気になったにもかかわらず、そうしたある種の物語をつくれないうと、非常に不安感を持ちます。一体、私に何が起きているのだろう、どうなってしまうのだろうというような漠然とした恐怖がいつまでも続き、病気としてぜんぜん安定しないというような状況になるのです。

3 不安に満ちた社会生活の中で

そうした人たちが臨床の現場で実際に増えていることを考えると、一般の人でも同じように、個人として自分の立ち位置がわからない、それを核とした物語をつくっていけない、という不安

感や、明日の自分はどうなるんだろうという恐怖感のようなものがあるのではないのでしょうか。

それと近い話なのですが、そうした自分の物語をつけない不安とは別に、もつと現実レベルで、私たちの生活にはさまざまな不安や恐怖の材料がありますね。例を挙げればきりがありませんが、例えば、この北大でも耐震構造強化ということで、工事中の校舎があるようです。おそらくマンション住まいの方は、自分のマンションの耐震構造はどうなのだろうかと非常に気にしておられるのではないかと思います。そうしたことも、つい去年まではあまり気にする人はいなかったと思います。よもや自分のマンションの耐震構造に問題があるとは思っていなかったはずですし、ましてや偽装しているとは想像さえしていなかったでしょう。

以前は、マンションを買う際にも、耐震構造をチェックするような人はあまりいなかったと思います。有名なブランドのマンションであれば悪いことはないだろう、というように、全く根拠のない信頼をもとに、後は予算などでマンション購入を決めていたのですね。

ところが、今やマンションを買おうという人は、誰もが耐震構造を気にしています。ただ、コンクリートの割合が何%であるかの数値を見ても、結局わからない。見たところで、専門家ではないので、それが一体、どれほどのものかよくわからない。わかったとしても、偽装しているかもしれないのですね。そうしたら、いくら見たって、いくら調べたって、ウソをつかれていたら

元も子もない。もつと不安になって、マンションを建てている現場まで行って、本当にコンクリートを約束通りに入れているだろうかと見に行く人もいるかもしれませんがね。

しかし、そんなものを見て、今日のコンクリートの入れ方は少なかつたのではないかと思つても、実はよくわからない。現場で作業している人に「コンクリートを少なくしてケチつていいのではないの」などと言つたところで、その人が「そうですよ」というわけはなく、「いや、きちんとやっています」と言うに決まっていますね。ですから、これは無駄な不安なのです。疑問を持つても答えが出ないわけですから。

食品でもそうですね。最近はスーパーで売っている物でも、賞味期限を偽造しているとか、書き換えている、生産地を偽っているなどいうことが、よく報道されています。スーパーで何か新鮮食品を買う時に、賞味期限、生産地をチェックすることはこれまでもあつたかもしれない。でもチェックしないで買う人、無頓着な人であれば、私などもそうですが、「スーパーに売っているのなら大丈夫だろう」と値段しか見ないという買い方をしていたのですよ。

しかし、おそらく今は多くの人が買い物に行けば、そうした生産地や賞味期限などを一応、チェックする。チェックしても、先ほど言つたように偽装しているかもしれないですね。そうするとチェックしてもほとんど意味はないのですよ。スーパーの人に「これ賞味期限を書き換えた

でしよう」などと言っても、「そうですよ」と言う人はいないから、これも聞いても無駄ですね。このように、疑問を抱いても、答えが見つからない不安があり、それが私たちの生活の中にここ数年非常に増えてきました。「無駄だから不安を持つな」とか、「意味がないから疑問を持つな」と言われても、やはり人は不安を持つたり、疑問を抱いてしまったりするのです。

疑問を抱いても、結局、答えが出ない。それで、それを選ぶかどうかというのは、後はもう自分次第です。でも、マンションに住まないわけにはいかない、エレベーターに乗らないわけにはいかない、電車に乗らないわけにはいかないから、大丈夫だろうか、ごまかされているのではなか、これは事故を起したメーカー製のエレベーターではないかと思いつつも使っているのです。

そうしたことほど心の健康に悪いことはないわけですね。全くわからない、ということに大きな不安がある。でも、それをやらすには済まされないとということ、非常に心配しながらも何かを使ったり、食べたり、乗ったりしている。こうした状態は、日本の社会に生きている人であれば、誰もがそうした状況にさらされています。

つまり、不安がある種、底上げされてしまつて、みんなが等しく、不安やストレスを抱えなければいけない。その解消方法は見つからないけれども、とにかく不安感だけが水増しされて、今

の私たちにのしかかっているような状況だと思います。

ということ、個人的な問題でも、普通の社会生活や日常生活を営む上でも、最近では答えのない不安があふれていて、自分自身の居場所や立ち位置がなかなか定まらないし、そこから何かの物語を紡ぎだしていくこともできない状況に、多くの人がさらされているわけです。

今、抱えている不安を何とかしなければならぬと思っても、それは社会の側にいろいろな問題があったり、社会の構造が変わってきているから起きていることであって、仮に、少し成熟が遅れているなどのことはあっても、個人の問題とはあまり関係がない。

しかし、最近の雑誌を見ても、「職場で自信を持つためにはどうすればいいか」とか、「上司に好かれるコミュニケーションとは何か」などのような記事が盛んに掲載されていて、「問題は私の中にあるのだから、私が何とかすればいい」、「私さえ自信を持てれば、不安も消え去り、自分の居場所が見つかっていくはずだ」というような、いわゆる内向き指向があると思います。つまり、個人の問題として内面化して、問題を解決しようという傾向があるのです。

ただし、そこで「すべてあなたが悪い」と言われるのは、誰にとつても非常に辛いわけですね。それで、どこかで免責されたいと思うのです。「あなたは悪くないよ」と言われたらという気持ちもある。しかし、「あなたは悪くない、社会が悪いんだ。だから社会を変えましょう」と言われる

のも、それはそれで大変です。

「自分ではなく、何か違うものが悪い」と思いたいということが、例えば「前世が悪かった」とか「あなたの守護霊のせいだ」など、超越的な、社会とも自分とも関係のない「霊の世界」などに責任を求めることにつながっているという傾向もあると思います。

4 抜け落ちる社会への視点

以前には、責任を親に求めていた時代がありました。ご存じのように、八〇年代後半から日本でも、いわゆる「アダルト・チルドレン」というような新しい心理学用語が、一般の人たちの間でブームになりました。

「アダルト・チルドレン」という問題は、自分の人生はうまくいっていないと思う人が、いろいろと原因を探った時に、実はその人自身に問題があったのではなくて、親に問題があったと思うことよって生じます。例えば、親の育て方に問題があった、十分な愛情をかけなかった、あるいは親が子どもの人生を支配しコントロールしていた、子どももそうした親に何とか好かれたいということ、いつも親の顔色をうかがうような人生を送ってしまった。その結果として、大人

になつてからも、自分の好きなことを見つけれないとか、どうしてもまわりの人の顔色をうかがつて、合わせてしまうというような、いろいろな問題が後遺症のように生じてしまう。その中で、自分はどうも自分らしく生き生きと生きていないといういらだちを持つ人が多い。それがいわゆる「アダルト・チルドレン」という問題です。

当時、こうしたとらえ方は爆発的に受け入れられたのですが、その理由は、何かうまくいかないと思つていた人たちが、「あなたは悪くない、あなたの親が悪いのです」と言われて、免責されたからです。

しかし、この「アダルト・チルドレン」の概念を日本に導入した心理療法士たちは、こうしてすべて親のせいにする考え方だということで、いろいろ批判を受けた時期もありました。実際、アメリカでは、子どもが親に対して「私の人生をめちやくちやにした賠償を払ってほしい」と訴訟に持ち込む問題も相次いだので、「アダルト・チルドレン」という概念を導入した人たちは、ある種、親の敵みたいに使われて、批判された時期もあつたのです。

この概念をアメリカから持ち込んだ一人である信田さよ子さん（原宿カウンセリングセンター所長・臨床心理士）というカウンセラーが、最近、八〇年代後半から九〇年代のこうした「アダルト・チルドレン」をめぐる騒動のようなものを振り返つて文章を書いているのですが、それを

読んでなるほど思ったことがありました。

彼女が言うには、「子どもを免責して、親を責めるためにアダルト・チルドレンを紹介しようと思ったのではない。一度、免責されて、まず安心して、自分は悪くなかったのだと思えた人が、次のステップとして、近代の家族制度によって、そうした構造がつくられてしまうのだということに気づき、そうした社会的な問題を解決することに目を向けるようになることを想定していた」ということでした。

つまり、近代的な家族制度によって、必然的に親が子どもを支配するとか、子どもは親の顔色をうかがってしてしまうような構造ができ上がってしまうのであり、閉塞された近代の家族制度にこそ問題があるのではないか、というとらえ方をしてほしかった。また、子どもという弱者が、力を持っている親に対して気を遣わなければいけないという問題は、子どもに限らず、社会的な弱者が共通して抱えている問題であり、社会的に解決していくことが必要だという発想を持つてもらいたかったということでした。

しかし、実際には、「アダルト・チルドレン」に対する受け止め方はそこまで至らなかったのです。とにかく子どもは「私たちは悪くない、親が悪い」というところで非常に大きなムーブメントになってしまって、それ以上発展しなかった。信田さんも「そこが問題だった」と反省を含

めて書いています。これを読んで「ああ、そうだったのだ」と思ったのですが、とにかく、何らかの形で免責されたい、という気持ちはもともと非常に強いものだと思うのです。

「悪いのは社会ではなく私だ、私さえ性格を変えれば、今の状況は変わる」という気持ちがある一方で、「私ばかりが責められるのはやはり辛い、もつと『あなたは悪くない』と言ってほしい」という、非常に二律背反的な気持ちがあるのではないかと思います。

しかし、何か社会という枠組みの中で抜け落ちた感覚がありますね。「親の責任」というのは、まだ社会から閉塞した近代家族制度の問題だ、という見方ができるけれども、今や、「私が悪くないのだとしたら、前世が悪かったのだ」、「大殺界で、運命が悪いのだ」というような、宿命や運命、大きな星の流れなどのせいにして、中間項が抜け落ちたまま、「私とスピリチュアルなもの」とか、「私と運命」などといきなり結びついてしまっている。その中間にある最も大事な現実や社会を変えていこう、そこに働きかけて何とかしようという気持ちは今、すつぽりと抜け落ちてしまっている。このようなことが今の状況だと思うのです。

もう少し補足すると、最近、少年犯罪や猟奇的な犯罪が続いていますね。その犯罪をめぐる姿勢にも、こうした傾向はあらわれているように思うのです。

これもうまく説明しないと誤解が生じるかもしれませんが、私がちょうど北海道に

いた八〇年代後半の時期に、埼玉で連続幼女殺人事件（一九八八―一九八九年）が起きました。今は死囚刑の宮崎勤青年が四人の幼い少女を殺害した事件に、私も非常に衝撃を受けた一人です。

当時は、今より個人情報に対する対応が緩かったせいか、警察が彼の実家に行く前にテレビカメラが入ってしまいました。彼の自室の様子が映し出されたのですが、そこには約六千冊といわれるコミックや膨大なビデオが並べられていた。それをカメラがバーツとらえて放送してしまったのですね。いわゆる性的な内容のコミックやアニメのようなものはほとんどなかったという話もあります。とにかくコミックなどがう高く積まれた部屋を見て、多くの人が衝撃を受けた。そして、いわゆる「オタク文化」（漫画やアニメ、ゲームなどの若者文化に没頭するマニアを八〇年代半ばから「おたく」と呼ぶようになり、そうした文化のこと）というものが、こうした犯罪を助長するのではないかと大論争になったのですね。

当時、私はまだ三十代になるかならないかのころで、自分自身もサブカルチャーに非常に恩恵を受けて、プロレス、アニメ、テレビゲーム、コミックなどにどっぷり漬かっていたものですから、それらが犯罪の原因ではないということ、非常に熱くなつて論争に加わつた記憶があります。今思うと、多くの人がこうした娯楽や文化が犯罪を助長するの否かに関心を持ち、宮崎という個人の特殊性や猟奇性のようなものに対して語るばかりではなくて、彼を生んだ土壌や影響

を与えた文化について、是か非かのように話し合ったのですね。

ところが、最近では、猟奇的な犯罪や少年犯罪が起きてても、それを生んだ土壌や背景にある社会構造についてほとんど言及がされなくなった。言及すると、「その犯罪者をかばうのか」とか、「だから仕方がないと言うのか」と反論されます。「貧困が生んだ犯罪だ」、「今の家庭の崩壊がこういう犯罪を招いたのではないか」という言い方をすれば、犯罪者を弁護すると批判されてしまうような時代になっている気がします。そして、「あいつはおかしな人間だった」とか、「許しがたい怪物のような人間だ」というように、個人の特殊な傾向だと片づけてしまったり、その事件を生んだ背景や土壌に全く言及しない、あるいは言及しようとしなないという傾向があると思うのです。

犯罪を犯した人物が「怪物だった」ということで、その人の家族の物語に関心を寄せずに、一気に極刑か否かというような次元の、非常に現実的な判断をしまっている気もします。こうしたことも、先ほどから話してきた、社会への視点が抜けている問題と、どこかでつながっているのではないかと思うのです。

5 「私と小泉さんの約束」

さて、こうしたことを前提に、今日の本題である「小泉政治は何だったのか」ということを考えてみたいと思います。

小泉さんの登場は、これまでお話ししてきたような問題に非常にマッチしている、フィットしているという気がしています。つまり、漠然とした不安や疑問を抱えている人たちにとって、あの種の救いの手のように受け止められたのではないかと思うのです。

これについては例を挙げればきりがありませんが、例えば、小泉さんは就任して早々に、メールマガジンを発行することを決めましたね。五年間の就任期間中、毎週木曜日に配信ということで、二百五十号という非常に多くのメールマガジンを出し続けました。

そのメールマガジンで私が衝撃を受けたのは、最終号で「この五年半の気持ちを短歌に詠みました」ということで掲載された「ありがとう 支えてくれてありがとう 激励 協力 只々感謝」という言葉です。これには「わーっ、すごい」と参りました。私の友だちに短歌の歌人がいるのですが、その人が「これを短歌というのだろうか。いやらしい、すごい」と言うのです。「では、

これは何？ 相田みつを（詩人、書家。平明でほのぼのとした作品で人気が高い）の言葉みたいなもの？」と私が言ったら、「それは相田みつをさんに失礼だわ」と言うのです。とにかく、そういう言葉で最後の二百五十号が締めくくられていた。これは象徴的なことだと思うのですね。

小泉さんは、一面、歌舞伎やオペラが大好きだということで、いわゆる文人宰相のように言われてきました。そういう人が「支えてくれてありがとう」という短歌を本當につくるのか、深読みしなくなってしまうのです。つまり、本當は流麗な短歌を詠めるのに、あえて国民にはストレートに直球でパツと届くようなものをつくったのか、いや、そうではなくて、小泉さんはそれだけの能力の人に過ぎなかったのだ、という考え方もできます。正直に自分の気持ちを短歌らしきものに詠んでみた。本人は実際に「ああ、いい短歌ができた」と思っているのかもしれない。これは本當に最後までわからなかったですね。

おそらく、それほど計算したわけではなくてストレートにやったのかもしれないけれども、そこまでするからには、裏に周到な策があるのではないかと思わせるものがあつたのです。

私にご紹介いただいたように、プロレスがとても好きなのです。プロレスについては、今やショーであるということが、半ば公然と語られていますね。しかし、プロレスで一番、興奮するのは、「もしかして、これはショーを超えてマジ（本気）か」と思う瞬間があるのですよ。「ここ

までやるのは、いくら何でも演出ではないだろう」とか、私生活でも実際に仲が悪いという情報が入ってきたりすると「本気で殴ったのではないか」と思っ、わからなくなることがある。

私はジャイアント馬場さんが好きなのですが、馬場さんは、プロレスとはスポーツというかたちをとったある種のショーであり、それを見せることは少しも悪いことではないという信念の下にやり続けてきた人でした。

アントニオ猪木さんも好きなのですが、猪木さんは、どこまで仕組まれていて、どこまでマジなのかがよくわからない。国会議員になってみたり、かつてアミン大統領（ウガンダの元大統領・ボクシングのアフリカのヘビー級チャンピオンの経歴がある）に「リンクに上がってこい」と呼びかけたり、北朝鮮に行ったりと、とても単なるパフォーマンスとは思えない瞬間を人々は感じるから、猪木さんは「希代の人」と言われて、カリスマ的人気を誇っていました。今でも影響力があるのですね。

そのように虚実の皮膜が見えなくなってしまう、もう超えたのではないか、どつちなのだろうと思わせるようなことが、最も「希代」なわけで、そういう意味で、小泉さんは最後の最後までそういう人であったな、と思ったのです。

それはさておき、小泉さんの二百五十号に及ぶメールマガジンですが、当然ながら、配信を希

望した国民一人ひとりのパソコンに届くのです。例えば、朝起きてメールをチェックすると、「首相官邸」というところからメールが来ているわけですね。これを「小泉純一郎」にすればもつとよかったと思うのですが、とにかく「首相官邸」という発信元でメールが届いている。

全国何百万、何千万の人に送られたメールだとわかっていながらも、一行目に「こんにちは、小泉純一郎です」と書いてあると、「私に来たのだ、私が呼びかけられている！」と思ってしまう。これはもちろん錯覚ですが、何千万の人に同じメール届いていることについて、私たちは瞬間的には連想できない。新聞に政府広報などが入ってくるよりは、自分のパソコンを立ち上げたら、首相官邸からメールが来ていたという方が、特別な気がします。

電子メールは新しいメディアですから、皆さんも、いたずらメールや請求メールが来ると、気持ちが悪いか、ドキツとするという感じがあると思うのです。何百万通と送られていると知っていても、個別に届けば自分に来たと思ってしまうところを、小泉さんのメールマガジンもうまく衝いたという気がしますね。小泉さんは、「他でもない、あなたに話しかけます」という印象を与えたり、「私が小泉さんに何か言われたのだ！」という気にさせてくれやすい人だったと思います。

また、総理就任後すぐに写真集を出しましたね。バスローブ姿や子どもとキャッチボールして

いる場面などプライベートショットも入れた写真集を出しました。その写真集の帯に書かれていた文句を皆さんは覚えていますか。それは「皆さんがファーストレディです」というものだったのです。

小泉さんは独身で、ご存じのようにファーストレディがいらない。これも「あなたがファーストレディです」と書けば完璧だったと思うのですが、女性読者が多いという想定で「皆さん一人ひとりが私のファーストレディなのですよ」という呼びかけで、写真集が売り出されました。それを見て、「そうだ、私が小泉さんを支えるファーストレディだ」と思う人はいないとは思いますが、でも、やはり少しドキッとするのですね。「私に言われているのかな？」と思う。

皆さんも、いろいろなコンサートに行かれて心当たりがあると思いますが、超一流のエンターテイナーは、会場に来ている全員が「今、私と目が合った！」と一回ずつ思わせるようなところがありますね。「彼は私を見ているわ!」と思わせる能力のある人が、超一流の演歌歌手とかエンターテイナーになれると言われています。

そういう意味では、「皆さん」というのではなくて、「そのあなたですよ」、「私はあなたに会いにきています」と個別に呼びかけられるということが、人を引きつけるようになっていく。従来であれば、それは気持ち悪いとか、不愉快だということで、むしろマイナスだったかもしれない。

多くの人に届く声を持った政治家や、国全体のプランを言える人、日本改造がどうのということ
を大々的に言える人の方が、私自身も信頼したかもしれません。

しかし、今は個人個人が、「今、私はどこにいるのだろうか」、「私の立ち位置はどこだろう」、「私
はどういった物語を紡ぎだしていけばいいのだろうか」という宙づり状態で、不安の中にいます。
そんな時に、「さあ、あなたがファーストレディです」とか、「私はあなたに、この呼びかけをし
ます」と言われると、「ああ、私と呼ばけられているのだ。この呼びかけに耳を傾ければ、もし
かしたら私の立ち位置がわかるかもしれない。あるいはこの人との関係の中から物語をつくって
いけるかもしれない」と、そこまで自覚的ではないにしても、潜在意識というか、深層心理的に、
そうした気持ちになる人も多かったのではないだろうか。

これからお話しするのは、私にとってあまりに衝撃的な話だったので、中身を少し変えて自分
の本にも書いてしまったのですが、二〇〇五年九月十一日の総選挙の時のことです。

その夜、私はTBSの選挙特別番組に出演するため、テレビ局にいました。選挙を振り返ると
いうようなテーマで、私の他に姜尚中さん（東大教授）と寺島実郎さん（三井物産戦略研究所長・
財団法人日本総合研究所理事長）と、比較的リベラルな感じの人が呼ばれたのですが、開票速報
では自民党が三百議席に達するかどうかという状況だったので、非常に場違いなところに来たと

いう雰囲気です話すこともあまりなかったのです。

私が大きな衝撃を受けたのは、その番組のプロデューサーしている局の幹部の人の話でした。「うちのかみさんも小泉さんの自民党に投票したのですよ」と言い出したのです。そのこと自体は特にどうということはないのですが、そのプロデューサーというのがそれまで、どちらかと言えば、体制批判的な要素もあるような番組づくりをしてきた人たちなのですね。

それで、そのプロデューサーは、奥さんが「投票したい」と言った時に、一応、「やめておけよ、自分のようなプロデューサーの妻が自民党支持というのはどうかと思う」と止めたそうです。そうすると奥さんは「だって私、小泉さんと約束してきたんだもの」と言ったのだそうです。つまり、その奥さんは小泉さんの街頭演説を聞いて、すっかりファンになってしまったのです。

その街頭演説に出くわすまでは、奥さんは特に自民党支持でも小泉支持でもなかったのに、演説を見て、一気に魔法にかかったように小泉ファンになっていた。「小泉さんは、私の方を見て、お願いします、入れてくれますね」というようなことを言って、「私はうなずいた」と言うのです。プロデューサー氏が「そんなの、小泉さんは見てはいないし、約束なんかしていないよ」と言っても、全く動じず、「私は約束してきた、裏切るわけにいかない」と言い続けたということでした。そうした奥さんの反応が、良い悪いという問題ではなくて、昨年の総選挙のリアルな姿を非常

に表していると思いましたね。つまり、小泉さんが郵政民営化のことで衆議院を解散して、顔面蒼白でテレビの画面に登場し、「私はそれこそ死ぬ気でやる」というような決意を述べた。あれを見て、私自身もそれは非常に見当違いなことをしてしまったのです。新聞社から「どう思いますか」と聞かれて、私は「郵政のことだけで衆議院を解散するなんて、本当にバカげている話で、国民もさすがに小泉さんには愛想をつかしているのではないか。重要な問題が山積みの時期に、自分のやりたかった郵政改革一つを争点にしてやるなんて、あまりにも自分勝手だ」と言ってしまったのです。

ところが、それは全く私の間違いで、その後の状況は皆さんご存じの通りです。小泉さんの記者会見などを見て、多くの人たちは、「彼は本気だ。本気でやっている人には、こちらも真剣に応えていこうではないか」とか、「この人は私に本気に語りかけてくれている、それに対して、私も何か応援しなければいけないのではないか」とか、そうした気持ちになった人もいたのではないかと思います。

もちろん、異なった理由で自民党に投票した人もいれば、単純に「刺客とかたくさん出てきて、シヨーとして面白い」と思っている人もいたと思うのですが、私は、「私だけはこの人の本気がわかってる」という気持ちになった人が多かったのではないかと思うのです。

そうしたことは、山口さんが紹介してくださった『テレビの罟』という本にも書いたのですが、多くの人たちは、「みんなが小泉さんや自民党に投票するから、私も投票しよう」と思ったのではなくて、「たとえ、みんなが投票しなくても、私だけは小泉さんに投票する」、あるいは「みんなが投票するかどうかどうでもいい、でも、私は投票する」という気持ちになった。そうした人たちがフタを開けてみたら多かった、ということだと思うのです。

確かに、総選挙後、自民党の中でも「こんなに勝つとはびっくりした」とか、「これは勝ち過ぎだ」、「勝ち過ぎて不安だ」などの意見もかなりありましたね。

このように、「私は投票したが、他の人がどうかまで考えられなかった」ということだったと思うのです。個別に「私と小泉さんの約束」で、それをどう自分は守るかとかいったようなことで投票して、選挙という社会や国全体の問題なのに、そこにおいても、結局、機能したのは、「私と誰か」という、個別の関係性だったのではないか。

こうして投票した人たちは、自分と小泉さんでつくる物語の中に、自分がしっかり杭を打たれ、ポジションニングができたということです。ある種の安心感とか、これまでの不安が解消されるような高揚感、陶酔感を味わったのではないかと私は考えたりしました。

このように、とにかく安心したい、「ああ、自分ってこうだったのだ」と納得させてもらって、

「ああ、そうか、私はこうすればいいんだ」と思いたい。そういう人々の気持ちというのは、これは政治の世界だけではなくて、本当にいろいろなところで見られると思うのです。

6 理屈を超える安心への渴望

話は少しずれるかもしれませんが、二〇〇六年の春、日本物理学会という学会で、非常に面白いシンポジウムが開かれました。これは学界を超えて、広く報道されましたが、「似非（えせ）科学」とどう立ち向かうか」というテーマのシンポジウムだったのです。

昨今、いろいろな意味での、「似非科学」という言い過ぎかもしれませんが、「科学」という名を借りたさまざまな商法や商品、インチキ的なものが科学的なもののようにまかり通っています。こういう実態に対して、本物の学者というか、科学者が黙って見過ごしていいのか、ということ、シンポジウムが開かれたのです。

「似非科学」について例を挙げれば、「ゲームをするとゲーム脳になって、頭が大変単純になる」といったような全く根拠もなく、学説とも言えないような仮説がひとり歩きしてしまっています。そういう状況に対して、今まで科学者であれば、君子危うきに近寄らずのような感じで、「言いた

い人には言わせておけば」と放置していただけれども、社会的に「いや、違う」と言った方がいいのではないか、というのがシンポジウムの趣旨でした。

いくつもの事例が挙げられましたが、例えば、「マイナスイオン」も、科学的に健康にいいと言われていますが、実証はされていない。それなのに、いろいろな機具にマイナスイオン発生装置がついています。私は先日、自分のペットの犬にブラシを買ったのですが、商品についていた紙に「犬にマイナスイオンを浴びせると臭いが消えて、精神が落ち着く」とありました。

こうしたことも洒落だと思えば、それほど目くじら立てる必要はないのですが、学会では、それによって商品として値段が高くなっているのであれば、そういう意味でも「科学的ではない」ということになるのではないか、という意見が出ていました。

そのように学者たちが正当な手続きで、「似非科学的商品」を暴いていく、ということについては世間の人はどう思っているのでしょうか。「インチキなら、金返せ」とか、「信じた私をどうしてくれる」というような抗議運動にはなりそうにはないですね。予見としては、マイナスイオンを本当に信じて買っている人は、使っているうちに「ああ、本当にいいわ」と思うかもしれないのだから、害が無いのでなければ、それでいいのではないか、というようなムードもあると思うのです。

シンポジウムを主催した物理学者が、インチキ科学の例として取り上げていた一つに、「水に対して『ありがとう』と言えば、水の結晶がきれいになる」という話が、今、流行っていることを挙げていました。この話は、ご存知ですか。

それを提唱する人が昨年、写真集を出して何十万部も売れたそうです。その人物によると、水に「ありがとう」という紙を貼るか、「ばかやろう」という紙を貼るかで、その水を凍らせた時にできる結晶のきれいさが違う、ということです。「ありがとう」と書くときれいな結晶ができて、「ばかやろう」と書くとき結晶ができずに、ドロドロしてしまう。

今、お笑いになった方は、「そんなこと、バカらしい」ということだと思うのですが、そういう内容の写真集が非常に売れたのです。

実際に、テレビ番組の中で実験してみたり、小学校の授業でやってみたところもある。小学校の給食のごはんを、「ありがとう」、「ばかやろう」とそれぞれ書いたビーカーに入れておくと、「ありがとう」の分は腐らず、「ばかやろう」の分はすぐカビが生えたと、大真面目にやってみている小学校があるのです。もちろん、こうしたことは科学的ではないけれど、ある科学者と名乗る人が写真集を出したり、講演をしたりしているわけですね。

私が今、教えている大阪の大学の講義で、この話をしたのです。「こんな話があるけれど、どう

「思いますか」と聞いたたら、「インチキだと思う」、「許せない」というような反応を示した学生は、実はものすごくわずかで、中には「感動した」とか、「すごいと思った」、「『ありがとう』という言葉は大切なことだとよくわかりました」という感想もありました。

しかし、一番多かったのは「どっちだっていいじゃないか」という意見でした。「『ありがとう』という言葉自体は悪いことではないし、水がきれいな結晶になるのであれば、それでよい。ましてや人に『ありがとう』と言うことはいいことなのだから、これが科学的に真実であつてもなくてもいいじゃないか。なぜ目くじらを立てて、これは似非科学だと糾弾しなければいけないのかよくわからない」。こういう反応が一番多かったですね。

人に「ばかやろう」と言うよりは「ありがとう」と言う方がいいことは確かですね。ですから、根拠があろうがなかろうが、科学的真実というものがあろうがなかろうが、結果がよければ、それで癒される人がいればいいのではないか。そんな考え方なのかもしれないですね。

こういった結果をどう考えたらいいでしょうか。若者たちがあまりに科学的ではないということかもしれないませんが、逆に考えると、それぐらいホツとさせてもらいたいとか、いいことを言ってもらいたい、安心させてほしいということかもしれないですね。

つまり、「ありがとう」はいい言葉だということの説明がほしいけれど、その説明が倫理的な問

題や道徳ではなくて、科学的にもこういうことがある、と言われると、なるほどと思ってしまう。科学的には検証できないことでも、自分が納得する根拠は理屈ではない。とにかく学者が言っているから「そうなんだ」と腑に落ちる、ということですよ。

この一つのバリエーションが、最初にお話ししたスピリチュアルな世界に根拠を求めるという傾向です。「前世から決まっていたことなのですよ」などと言われて安心するわけですね。

ここにおられる皆さんは、こうしたことはウサン臭いと思っておられますよね。例えば、「あなたが銀行員になったのは、あなた自身が非常に几帳面な性格で、数字にも強かったからですよ」と言われる方が、「あなたの場合、前世からお金を管理する仕事をしていました。ローマ時代に徴税をしていたような人なので、現世では銀行員をやっているのです」と言われるより、納得がいくと思います。

ただ、銀行員になった理由というような話ならいいのですが、「今、なぜ私はこんなに困っているのだろう」とか、「不安なのだろう」、「迷ってしまうのだろう」と思った場合、その理屈を「あなた自身の人生にこういう問題があるから」、「こういう社会だから、あなた自身も仕事が見つからずに大変なんですよ」と言われるよりも、むしろ、「それはあなたの前世の行いが悪いからです」とか、「あなたの守護霊が今少しいたずらをしているから」などと、超越的なものを持ち出されて

説明されるほうが、「なるほど」と腑に落ちるところがある。

あるいは、「もう何も考えたくない」という場合も、こういうふうになんて思えばいいか、人生に問題があるということになると、自分自身が働きかけて何とかしなければいけないと思う。しかし、守護霊や前世を持ち出されたり、「科学が証明している」と言われてしまうと、もう自分では太刀打ちできないから、「なるほど」と言うしかない。そこで納得してしまいたいという気持ちも非常に強いのではないかと思うのです。

逆に言えば、特に思考力が落ちたとか、想像力が欠如しているということではなく、それぐらいのことを言われないと安心できないぐらい不安だということです。先ほどの少年犯罪などの犯罪者の問題でも、「社会構造から考えましょう」と言われても、面倒くさいこともあるし、そんなことをしても安心できない。それよりは、その犯罪者がモンスターで、前世から犯罪者の星の下に生まれているのではあり、死刑に処すれば、その問題はなくなるのだ、というように、パツと言われたほうが、「なるほど」と思う。それぐらい、逆に、不安が強いということなのかもしれないですね。

だからこそ、今回の安倍首相の支持の高さについても、私たちは家柄がいいなどのことで安心しようとしているのかもしれませんが。「家柄や育ちがいいので、悪いことはすまい」という感覚や

「私にはもう太刀打ちできない血統の下に生まれている」ということに説得力を感じるということなのでしょう。それは、今の天皇の問題でもそうかもしれない。万世一系の価値を感じて、去年の女帝問題の時にも男系にこだわっている人が多かったのですね。あの問題も類似しているかもしれない。

自分が何も手を下せない、自分ではどうにもできない血統のようなものが、今、説得力を持っているということです。万世一系の天皇を戴いている日本だから、自分も日本人として納得できる、自分にはどうしようもないところで、逆に、納得したり安心したりしているという傾向も非常にあるのだと思います。

もちろん、そういう傾向が素晴らしいとか、いいことだとは思わないですね。あるいは、非常に問題が多いことだと思います。こうした傾向は、何か積極的な選択をした結果ではなくて、ある種の社会問題や個人の病理のようなことです。その裏返しであったり、とにかく解消したいがために起きている「症状行動」——「症状から出ている行動」という専門用語ですが——であって、決して政治的な正しい選択などというような立派なものではない。

こうした傾向は、「とにかく、この不安を何とかしてほしい」、「安心させてほしい」、「自分の立ち位置を決めてほしい」、「何かの物語の一端に自分は立っているという気持ちにさせてほしい」

というところから、止むにやまれず、出てきた選択であり、行動なのではないかと思うのです。そして、そう思わせてくれる人を、私たちは「好き」と感じるのではないか。例えば、「政策のことはよくわからないけれど、あの人なら安心させてくれそうだ」という具合に。

しかし、政治は、もともとそんなに正しい選択や理に合ったことで投票したりしているわけではなくて、多くの人たちが好き嫌いや義理など、非常にウエットな、理屈とは違うところで行動しているのかもしれない。

政治家の人たちも、立派な政策を掲げて理念で動いているというよりは、別の関係性の中で、こうした方が得だとか、今はこうやっておくべきだということで行動していることも多いわけです。ですから、政治家に対する選択や投票がすべて症状行動的であるというわけではなくて、もともと主体的に選んで決めることはできないと思います。

しかし、現在の日本の状況は、精神科医の私から見ても、ある種の病理の裏返しや、その病理を何かの方法で解消しようとしていることの結果ではないかと思えるのです。そうした見方が合っているかどうかは、まだわからないことですが、こうした見方以外に選択の余地がないような状態になっているということであり、それは健全なことではないという気がしています。

時間が来ましたので、私のお話は一応、ここまでにさせていただきます。後は山口さんとやりと

りをしていきたいと思えます。ご清聴、どうもありがとうございました。

第二部 対談 香山リカ×山口二郎

1 なぜ矛盾が気にならないのか

山口二郎 今日では立ち見の方もおられるほど大変なお客さんの入りです。これも香山さんの人気の表れでしょう。

さて、この後の時間は、まず私が日ごろ感じている問題について香山さんと議論させていただいた後、会場から質問をいただくということで進めたいと思います。

私と香山さんとは年齢が近いのです。私が一九五八年生まれ、香山さんは六〇年生まれで、二つしか違わないので、ほぼ同じ時代の、いわゆる戦後民主主義の時代の教育を受けて育ったのです。最近の香山さんの著作を読んでも、立ち位置というか、基本的な足場は私と同じだと思います。

す。つまり、人間というのは自由で平等であり、政治の世界には民主主義や平和など大事な価値があつて、それはいつの時代も守らなければいけないとか、そうした基本的な前提を共有していると思うのです。

ところが、今の時代に起こっていることは、「自由とはかなりしんどいことだ」とか、「民主主義と言つても、所詮、無理だろう」など、理想や建前のようなものをうんと相対化してしまう動きです。そういう中で「いや、そうではないんだ」と一生懸命に言う立場としては、言いたいことを言っているわりに、なかなか届いていかない、というもどかしさを強く感じています。そのもどかしさの一つに、政治を批判することが非常に空回りする、というか、上滑りするということがあります。

私は、小泉前首相の政治は全く有害この上ないということと、ずいぶん批判をしてきました。その時の批判の仕方の一つが、要するに、矛盾を衝くということです。「こう言っているけれど、実際にやっていることは違うではないか」と指摘することを一生懸命やるのです。

しかし、小泉の場合、イラクに自衛隊を出すという時も、「非戦闘地域に自衛隊を出す」というので、「非戦闘地域はどこですか」と野党に問いかけられて、小泉は「それは自衛隊が行っているところだ」とか、「自分に聞かれてもわからない」という。こんなことは政治家にあるまじき発言

だと思うのです。

年金問題についても「人生いろいろだ」とか言って、滅茶苦茶にはぐらかし、真面目に言葉を語っていない。それは、Aがあつて、その上にBがあつてというような論理の積み上げを否定してしまうことで、それが小泉話法なのですよ。しかし、それで、いくら「矛盾している」と言っても、そういう批判が世間には全く届かないという感じがある。

最近の安倍晋三首相については、香山さんも『美しい国へ』（文春新書、二〇〇六年）という彼の著書に対して辛口の批評を『論座』（二〇〇六年十月号、朝日新聞社）という月刊誌に書いていましたね。私も、あれを読んで、五十いくつにもなっても、「僕のおじいちゃんは本当に偉かった」とみたいなことを平気で言う人に、日本の伝統の美風を受け継げるものか、冗談じゃない、と言っているのです。

そこで香山さんに質問したのは、矛盾というものについて、ここまで日本の普通の人鈍感になってしまったことについてです。つまり、言っていることが一貫していないのではないかというような矛盾を簡単に許してしまうということについて、精神的に何か説明がつけられるのでしょうか。

香山リカ 精神分析的にということではないと思いますが、先ほどもお話ししたように、結果さ

えよければそれでよい、という結果オーライの傾向があると思いますね。似非科学についても、根拠はともかく、それでいい気分になったり、「なるほど」と笑えたり、感動して涙を流したりできれば、そこまでのプロセスについては、特にいいじゃないかというような傾向があると思います。

その理由が何なのか、山口さんが言われたように、時代なのか、世代の問題なのか、ある特定の年齢層に起こっているのか、それはわかりませんが、時代そのものがそうなっているのかなと、私も非常に気になる場所なのです。

山口 矛盾を衝くということは、言ったことは守るとか、自分が一度言ったことはきちんとして最後まで貫くという、そういう大事な徳目のような前提がなければ成立しない。そういう前提なしに矛盾を批判しても、「人間なんて矛盾したものだから」で終わりになるのではないか、と思いますね。

香山 無理やり精神医学的な解釈をすれば、最近、解離性同一障害というものがありません。それは人格の連続性とか記憶の連続性がなくなってしまうことで、それが極端になると多重人格になってしまうのですが、そうした疾患が臨床の場で激増していると言われています。

そういう人たちにとって、矛盾は全く問題がないのです。昨日の自分と今日の自分が違ってい

でも、昨日言ったことと今日言ったことが違っていても、特に問題を感じない。また、他者がそうであってもそれを問い詰めたりとか、一貫性がないというように連続性や統合性について相手を批判することはないのでね。

山口　なるほどね。今、結果がよければそれでよい、という傾向があると言われたけれども、小泉政治五年間の結果は惨たんたるものですよ。

全世帯の年間収入は五年間で七十万円ぐらい下がっているのですね。年間の自殺者は三万二千人、そのうちの九千人ぐらいの人が借金や失業を苦にして自殺しているわけです。これは交通事故の死者よりも多いなど、国民の不幸の数字はほとんどウナギ登りで、国民の幸福を示す数字は下がっている。結果から見れば、こんなものが評価されるはずはないと、合理的な推論として思ってしまうのです。

香山さんの『テレビの罟』という本を私は三回ぐらい読んで、最近も学生たちと議論したので。論点は、自分たちにとって結果は最悪で非常に損をしている、小泉さんに拍手を送ってしまうのはなぜか、ということ、これについては先ほど、個人的な関係性の幻想というかたちで説明をなさったのですが、こういう身もふたもない厳しい現実を、そういう幻想で覆い隠せるものなのでしょうか。私にはそこが一番わからない。

香山 私もそこは何とも言えないし、少し違う話になるかもしれませんが、こんなことがあるのです。東京都内では非常に困窮している人がたくさんいますが、私の仕事場の近くにあるファーストフードのハンバーガー店では、夜十時ぐらいに、その日廃棄処分するハンバーガーをゴミ収集のために路上に出すんですね。その様子を帰りが見るのですが、廃棄されるハンバーガーを待っている人たちがいて、元締めみたいな人が配っているのですよ。待っている人の中には、いわゆる野宿生活者やホームレスと言われている人たちにはとても見えない、普通の若者たちがかなりたくさんいるのです。

この人たちはどういう生活をしているのかわからないのですが、廃棄処分したハンバーガーをもらわなければいけないというのは、おそらく相当な窮乏だと思っております。そういう人たちがいる一方で、六本木ヒルズの超高層ビルがガンと建っているでしょう。それを見て窮乏している人たちが腹を立てているかというところ、おそらく立っていない。

むしろ六本木ヒルズがあつた方が、自分もその地続きの町にすることで、そこまで出かけて行けば、お金は使えないにしても、何となく高揚した気分になれる、華やかな気持ちになれるというところで、おそらくあつてほしいと思つていのではないかな、と私は思うのです。そんなに甘いものではないと思えますか。

山口 多くの若者は、やはり本当にかつかつの暮らしをしているわけですね。幻想だけでそうした現状を受け容れるのは無理ではないかと思えます。しかし、現状の不条理をともかく受け容れ正当化するプロセスというのは、科学的に検証するという話ではなくて、解釈の説得力の問題だから、それ以上、私も反論することはできないのです。

2 内向き志向とリスク社会

山口 香山さんの造語で「プチナシヨナリズム」というのがありますが、私は「プチ平等主義」というように、「プチ○○」という造語を、最近使わせてもらっています。

これも「プチ○○」ということなのかもしれませんが、六本木ヒルズを見ると腹は立たないけれども、公務員宿舎を見ると腹が立つ、ということはありますね。つまり、二百万円の家賃は全く腹が立たないが、三DK六五平米で三万円の家賃というのは腹が立つ。まさに正義感の矛先が非常に近いところに向かっているという感じがしますね。

分割して統治しているというわけではないが、最下層と下層との間に微妙に線を引くというか、そういう演出があるのかなと思うのですが、どうでしょうね。

香山 その演出は、誰がやるのですか。

山口 誰が演出しているか、これもまた難しい。本当に誰かが仕組んでやっているかどうかもわからない。それは先ほどの小泉さんの演技もそうです。どこかに演出家、振付師が周到なシナリオを書いているのかどうかも検証のしようがない。結果的に、あるところにスポットが当たって、そこで敵と味方の識別ができてしまうということかもしれません。だから、「官から民へ」というような議論が関心を集めたのかもしれない。

香山 全く互いに立ち入れないような大きな違いではなくて、近親憎悪のように、微妙な差異に目をつけて、「あいつの方が少し得をしている」という感じ方があるのかもしれないね。

山口 そうです。そういう意味では、香山さんも北海道生まれですが、今、北海道が東京から見たいじめの対象になっている。「明治維新後にできたところだからって、国に特別扱いしてもらって、補助金や公共事業をわんさともらっているじゃないか、いいかげんにしろ」というように。

都会で税金を払っている人たちのお金が北海道に流れて行って、わけのわからない道路工事に使われてしまうというような見方で、それなりに正義感に基づいて批判しているのではないかと思うのですが。

香山 それは東京都の中でも同じようなことがありますね。例えば、都民税を払っている千代田

区や中央区の人が、なぜ足立区民の生活保護費に自分たちの金が使われなければならないのかと抗議してくる例があるようですよ。しかし、それは足立区に住んでいる人も、昼間、千代田区に働きに来ている人がたくさんいるのだし、千代田区民だって、足立区の工場でつくった靴を履いたりしているのだから、そこは相互扶助でいいのではないかと説明するしかないのですが。

山口 私も足立区の区会議員に言われたことがあるのです。生活保護の人たちを世話していると、「どうして、あんな連中の世話ばかりして、普通の区民のために働かないのだ」と文句を言われたと嘆いていましたね。

香山 足立区は東京都内で、最も生活保護世帯が多いと言われている区ですね。

山口 そういう状況を見ていて、さらに大きな疑問がわくのです。そうした自己中心的で、他者との共感のようなものが非常に薄くなっている現実がある一方で、世の中の文化の動きを見ると、純愛映画や、美しい人間性を歌ったSMAP（男性のアイドルグループ）の歌がとも流行っている。コミュニティや仲間志向、また、他人に無償の愛情を捧げることは美しいというようなメッセージを発信する文化が、今、非常に受けている。

この矛盾については、どう説明されますか。難しい質問で申し訳ないですが。

香山 それも内向き志向の表われではないでしょうか。例えば、「感謝しよう」というのも、全人

類に対してというより、たかだか恋人や親など限定された現実の中での思いやりや想像力なので
すね。そういう意味では、先ほどの内向き志向の延長とも考えられる。

もう一つは、先ほど安倍首相の「おじいさん、お父さんが大好き」という感じは変だという話
が出ましたが、そのようにすでにある権威に対して、誰か演出家が仕掛けているわけではないけ
れども、特に疑問を持たないで感謝する、というような人は、為政者にとつても非常に扱いやす
い人なわけですね。「なぜ、僕を生んだのだ」というよりも、「生んでくれてありがとう」という
子の方がやりやすい。

そういう意味では、先ほど、子どもが免責されたがった時代があったと言いましたが、今は逆
に、親の免責が非常に流行っているのです。「スピリチュアル〇〇」というような題名の、最近出
回っている本を読むと、たいてい書いてあるのは、「子どもはきちんと自分で親を選んで生まれて
きている」ということです。どんな親であっても、子どもが自分の意志で生まれてきているとい
うように説いているのですね。

つまり、「親に責任はない、子どもの方が選んできたのだから、子どもは親に対してきちんと感
謝の気持ちを持つべきだ」というようなロジックになるのです。

そういう意味で、あらかじめそこにある人間関係やシステムなどに対して疑問を持ったたり、そ

これから抜けようとしたり、反発したりすることは許されないというか、そんな感じ方があるのではないかと思うのですね。

山口 最後の質問として、ちょうど今抱えている疑問を出してみたいと思います。

政治は、見ず知らずの人間と協力して世の中の問題を解決するという作業なので、香山さんが話してこられたような生き方に、みんながどどんはまっていったら、世の中はやはりうまくいかなくなってしまいますね。

香山さんのお話のキーワードであった「不安」に関連する言葉ですが、私は最近「リスク社会」という言葉を使っています。不安やリスク社会について、個人個人が背負っても、所詮、うまくいかないと思うのです。例えば、マンションの耐震偽装問題については、きちんと建築基準法を見直して、チェックの仕組みをつくるとか、食品が不安だ、あるいは鉄道会社が事故を起こすなどの問題であれば、「官から民へ」というよりは、きちんと役所が役所らしく仕事をするようにする。それによってみんなが安心することができるなら、きちんと税金も払うというようなことが必要です。

つまり、今起こっている他人の不幸は、何かの拍子に自分のところにくるかもしれないという議論を一生懸命して、このリスク社会への対処を訴えているのですが、この主張を、もう少し社

会的に広めるためには、どういう工夫をすればいいでしょうね。

香山 今はおそらく、そういうリスク社会に対して、ゲームのハンカチ落としのように、「私のところに来ませんように」と願って、自分でカギをつけるとか、防衛するということで汲々としてしまっていますね。

本当はもう一歩進んで、そうしたリスクが起きないようにするために、自分も少し我慢するか、広い視野で考えるときか、社会に働きかけることが必要だということはもつともだと思っただけです。しかし、それを精神論で言ってもだめで、「こっちをとると、これぐらい得があり、あっちにすると、あなたに不幸が振りかかる可能性は何パーセントです」とか、「何万円、損しますよ」と言って、現実的な取引のように説明することが意外に有効ではないかと思うのです。

山口 損得の議論のほうが、正しい正しくない、というよりはいいということですね。私のような政治学者の弱点かもしれないませんが、やはり、「こちらが正しい」というように、つい言ってしまうのですよ。

香山 犯罪予備軍と言われるような感じの人たちを患者さんとして扱うことがあります。その時も、「道徳的に、犯罪を起こすのは、人を不幸にするからいけない」とか、「あなたも不幸になる」という言い方はあまり通用しないのです。

逆に、「あなたがいま自分の欲望に負けて、物を盗んでしまったら、今回はもう実刑になって、懲役〇年よ。今、我慢すれば自由を謳歌できる」とか、「もし刑務所にいったら、あなたの収入はわずかになってしまいが、我慢して社会で働いていれば年収〇〇万円ぐらいはある」というように説得した方が有効な場合があるのです。これが精神科医の説得の仕方としてふさわしいかということはあるかもしれませんが。

第三部 質疑応答

司会(山口) それでは、会場から質問をいただきましたと思います。なるべく簡潔にお願いします。

○社会病理に対する処方箋は

質問者 1 香山さんには、社会の病理に関する問題がたくさんあることを話していただいて、共感しているところです。お聞きしたいのは、こうした社会の病理への処方箋、つまり、訳もわからず自民党に投票してしまう人をどう変えていくのか、ということについて具体的な処方箋や方策があれば教えていただきたいと思えます。

香山 病気の治療は、病識という病気の意識を持つところからしか始まりません。しかし、病気の人はたいいてい、それを否認します。「私は病気ではない」、「病気だというのは失礼だ」というよ

うに認めないところがありますね。これは社会病理についても同じことではないかと思えます。ですから、「あなたの、その選択は、あなた自身の決断ではなくて、もしかしたら病理現象かもしれない。あなた自身がそうした不安を抱えていたり、何かに救いを求めていますか」と尋ねて、そこに気づいてもらうという作業をしていくしかないですね。

そうしたことは診察室に来る人に個別的にはできません。しかし、先ほど山口さんが言われたように、もっと広く一般の人たちに呼びかけるにはどうしたらいいかということですが、先ほどから言っているように、今は広い呼びかけというのはあまり意味をなさないので。メールマガジンで「あなたにきてほしい」、「あなたに私は言いたいです」という呼びかけにしか反応してくれないという傾向が、今は一般的になっている。学生もそうです。学生をいくら呼び出ししてもこない。しかし、「あなたは来てください」という呼びかけ方に変えると出てくるという傾向性はあります。

ですから、どうやれば個別に多くの人に呼びかけられるかという、これもまた非常に矛盾のあることなのですが、小泉さんのメールマガジンのようにやるのがいいかどうかは別として、「これはあなた自身に関係している問題なのだ」という呼びかけ方を、多くの人たちに行うことだと思います。これは不可能ではないと思えます。

というのは、今、若い人たちの間でメガヒットといわれるようなCDや本でも、聴く人は、おそらくみんなが聴いているから聴くとか、みんな読んでいるから読むというのではなく、「私に対するメッセージだ」とか、「私はこれによって感動した」とか、非常に個別的な呼びかけとして受け止めているのではないかと思うのです。

ですから、多くの人々に呼びかけていながら、それぞれの人が「これは私のことだ」と思わせるようなシステムが何かあると思うのです。それはおそらく政治学者や精神科医を超えて、もしかしたら、マーケティングに詳しい人とか、ものをつくる、商品を売る人たちが、そのノウハウを持つているのかもしれませんが。そうした技術を使って姑息にやるということではないのですが、ある程度、戦略的にやらないと難しいのかなという気が私にはしています。

質問者 1 山口先生にお聞きしたいのですが、現在の国政選挙において、開票作業は正しく公平に行われていると思っていらいっしょにいますか。

山口 アメリカみたいなことはないと思います。日本の場合は、やはり紙できちんと残していますから、インチキをする余地はあまりないと思いますよ。

質問者 1 千葉県習志野市や石川県珠洲市などでは、以前、市長選挙に不正があつたと問題になりました。こういう選挙の不正は、おそらく国政でもあるのではないかと思うのです。できれば

監視団を増やすというようなことが必要なのでしょうか。

山口 日本の役人は、かなり律儀ですからね、そういう時はきちんと仕事をしていると思いますね。

ただ、今の香山さんの話に関連して言えば、民主党は、二番煎じというか、変なマーケティング会社を使って、全くピント外れのメッセージを出したりして、そこで小泉さんに完全に負けてしまった、というのが前回の総選挙だったと思うのです。

確かに、先ほど話に出たように、最近は、無償の愛が流行ったり、コミュニティ志向もあるようだから、全くお先真つ暗ではないと思います。例えば、NHKの番組で「ワーキングプア」という貧困問題の特集をしたら、非常に大きな反響だったそうです。そうした番組を通じて、社会正義にもう一度目覚めるというような人がたくさんいるらしいことは確かなので、あきめずに、なるべく多様な方法で情報を出していく以外に道はないと思います。

○メディアの課題は何か

質問者2 本学の教育学研究科に所属する者です。私は香山さんの『テレビの罠』や金子勝さん

の『メディア危機』（A・デイヴィットと共著・NHKブックス、二〇〇五年）も読みましたが、メディアをつくる側と見る側の教育が非常に大事だと感じています。私自身も北大で映画館をつくることを考えたりして、大学でも映像などの媒体について見る側、出る側、つくる側の教育をしなければならぬのではないかと思っています。

そこで、テレビ番組などメディアに出ておられる立場から、メディアの問題点についてお話しいただきたいのです。この質問は山口先生にもお答えいただければと思います。

香山 まず、メディアを見る側の教育、つまりメディア・リテラシーの必要性は本当に長いこと叫ばれていて、いろいろな試みが行われています。にもかかわらず、去年の総選挙のような、いわゆる「小泉劇場」と言われるようなことが簡単に起きてしまう。

先ほど山口さんが言われたような「矛盾を衝かない」、「プロセスはどうでもいい」というような傾向も、やはりテレビや映像のインパクトと無関係ではないのではないかと思います。

例えば、小泉さんの靖国参拝にしても、参拝する前の世論調査では「反対」という人が多かったのに、参拝後はむしろ「よかった」と回答した人が増えていた。そういう人たちは、「参拝そのものがよかった」というよりも、「あの映像を見せてもらってよかった」というような受け止め方をしてるのではないかと思います。お盆休みの八月十五日の朝に、テレビをつけたら、小泉さ

んがりりしいモーニング姿で映っている。官邸を出るところから参拝まで中継がずっと続いて、あれほどりアリティーのあるドラマというか、スペクタクルはないわけですね。狙撃されるのではないかと、ビクビクしながら見ている。それで、見た後に、参拝の是非とは別に、「いいものを見せてもらった」、「よかったのではないか」という返事をした人も多かったのではないかと思うのです。

そのように、映像やそれに伴うテロップという強いメッセージが一瞬にして映し出された時、そこに至るプロセスや、それがどういう結果を招くかといったような立体的な思考が全く停止してしまって、そうした絵がよく見えるかどうか、いい気分になったり感動させてくれたりするかどうか、というところで思考停止してしまう。それではいけないということで、さんざんメディア教育は行われてきたはずなのに、結局、有効な手立てになっていない。これは非常に大きな問題点ですね。

それから出る側にも難しい問題があります。私自身もいくつかの情報番組でコメンテーターをさせてもらっていますが、指示を出すような演出家がいるかどうかで言えば、ほとんどの情報番組にそのような演出家はいない。出る前に打ち合わせして、「ここで、こう言ってください」という指示はなく、「自由に、発言ください」と言われるのです。

しかし、本番が始まると、何か雰囲気ができ上がっていて、自分に今日課せられている役割は何かということのみなが認め合つて、微妙にそれに即したことを言ってしまうのですね。与えられた立場とは違う意見が言いにくい雰囲気があり、そうした暗黙の了解が読めない人はもう出られないのです。そこでとんでもないことを言つてしまつて、逆に人気が出る人もいますが、おそらく、普通の評論家や学者という立場で出演して、空気が読めないことをすると、もう頼まれなくなつてしまう。逆に言えば、そこに居もしない演出家の意図を汲み取るような、ある種の嗅覚のある人がテレビに出ているのですね。それは、もちろんいいことではないと私も思つていきます。

私も、山口さんが最初に言われたように戦後民主主義教育の洗礼を受けて育つてきて、平和や平等を重んじる立場で発言をしているので、もつとそれをはつきり出してほしいと視聴者から言われることもあるのですね。確かに「もつと憲法を守れ」とか、「平和は大切に」と言つてもいいし、言いたいとも思いますが、言つたら、おそらく次はもうお声がかからない。それが嫌だというのではなくて、それでも私は、その場の空気を読みながら、その中でできる限り言いたいことを言い続けて、機会を失わないようにしたい。それはテレビに出たいからというより、発言をしたいということなのです。それを今、自分はやっているつもりです。

ただ、それも限度があるので、いつか言わなければいけない時は、バーツと言いたいことを言つて玉碎してしまうかもしれない。「玉碎」は戦争用語で、平和主義の私としてはあまり使いたくない言葉ですが。

山口 香山さんが今言われたことは、かなり本質的な、日本における現代の権力、そして政治の中枢部にかかわる話だと思います。

『国家の罟』（新潮社、二〇〇五年）という本を書いた佐藤優さん（元外務事務次官・起訴休職中）に、鈴木宗男氏（衆議院議員・二〇〇二年に不適切な北方領土支援に関する容疑で第一秘書が逮捕され、同年、別件の収賄斡旋容疑で自身も逮捕された）と同時期に逮捕された事件（二〇〇二年、北方領土支援に関する偽計業務妨害で逮捕、起訴された）について話を聞いたことがあります。「国策捜査されたという話ですが、この国策は誰が決めたんですか」と尋ねたら、「決めた人なんていません」と言うのです。

彼が言うには「日本は、相互忖度（そんたく）社会だから、忖度する、つまり、互いに心の内を読んで、何でも物事が決まっていくな。だから、鈴木、佐藤の逮捕も、検察側が世論や国民を忖度して、あのようにしたのだ」ということでした。これには、なるほどと思いましたね。つまり、今の権力は、忖度する、つまり、心の内を読み合うところに発生するのです。

香山　ですから、そこを間違っではいけないと思うのですよ。よく平和主義的な集会に行くと、参加者が「国家権力の悪だくみを許すな」と話していたりする。しかし、その悪だくみをしている国家権力に大ボスがいるなら、その人をやっつけなければいけないけれど、そういう人はいないのです。日本を、自分たちの好きなようにしてやろうというような権力者がいるわけではなくて、みんなそれなりにいい国にしたいと思っっている。安倍晋三さんもそう思っっているだろうが、それでも、悪だくみがあるように見える。

そこで一番問題なのは、悪だくみがあると反応して、私たち自らが、すすんで監視社会になるように振る舞ってしまっているということなのです。

山口　それが二十世紀のナチズムと現在の状況との違いですね。圧倒的独裁者はいないので。佐藤優さんとの話で、みんながそれぞれリスクをとる、ということから物事はガラッと変わる、という指摘がありました。要するに、相互付度社会の縛りを断ち切るためには自分がこんなことをしてもいいのかなと迷っても、とにかく一歩踏み出すことが大切だということを言っているのですが、私も全くそうだなと思いました。

ところで、先ほどのテレビ出演の話ですが、確かにオリンピックのように「参加（出演）することに意味がある」というようなところがありますね。

私が以前、驚いたのは、釧路方面に講演に行った際に、講演後の懇親会の席で「私は先生のファンです」と話しかけてきた人がいて、御礼を言ったら、「中西輝政さん（国際政治学者・保守系のオピニオンリーダー）」と先生のファンなのです」と言う。本当にびっくりしましたが、これがまさに矛盾を物ともしない現代人の解離同一性障害ですね（笑）。

冗談はさておき、私が今大事だと思っているのは、テレビに参加するということです。特にきちんとして受信料を払ってNHKを見ましようと言いたいですね。時々、葉書を出して「この番組はよかった」などと感想を伝えることも大事です。そうすると、その番組は続きます。

それから、今後はテレビも多チャンネル時代になっていきます。私も時々、BS放送やケーブルテレビのマイナーな番組に出ることがあるのですが、地上波デジタル放送がどんどん普及して、チャンネルは増えるがコンテンツがないという状況になれば、今はマイナーな番組でももっと多くの人に見られる時代が来ると思います。つまり、いろいろな角度の議論が多くの人に届くようになるという可能性を期待しているのです。

○自殺者増加にどう対応するか

質問者3 自殺が増えているというお話が山口先生からありました。三万人以上の貴い命が失われる、つまり、一つの小さな都市が毎年消失するぐらいの問題が起きています。これはもう社会病理現象を通り越して、かなり異常な状態だと思います。しかも毎年増えています。

この背景には、経済苦、借金苦ということも多いようで、政治の失敗もあると思います。また、この間、立川市であったように小学生が自殺するということでは、教育委員会や学校の対応については疑問に思っています。さらに、うつ病も要因になっていることがあります。

今、SSRI（「選択的セロトニン再取り込み阻害薬」という新世代の抗うつ薬）という新しい抗うつ剤がよく効くと言われてはいるのですが、もしそういう薬で治るならば、皇太子妃ももっと早く治っていてもいいはずで、薬だけでは治らないと思うのです。精神科医の立場から見ると、うつ病は脳の病気と考えていいのか、つまり、最近のように脳内伝達物質の異常を薬で治そうというような考え方でいいのかどうか、教えていただきたいと思っています。

香山 うつ病は、あいまいな言い方ですが、非常に漠然としていて範囲の広い病気です。ストレ

スもなく円満な生活を送っていても、突然、発症することがあり、脳の病気としか思えない場合もあります。どんなに健康に気を遣っていても風邪をひくのと同じです。その一方、いろいろな人間関係の葛藤や大きなストレスなどで、いわゆる神経症に近いうつ病もあり、レンジというか、スペクトルの幅が非常に広いのですね。そうしたことを見極めながら治療していく必要があります。

幅は広いのに、結局、同じ薬を使ったりする理由については、説明が長くなるのでませんが、脳の病気ということにしておいた方がわかりやすいと、精神科医の間で受け止められている傾向があることは否定しないうね。

うつ病が脳の病気に近いものなのか、それともっと人間関係や環境の問題などストレスに係したもののかは、それぞれ個別に違うので、精神科医もあまり簡単に決めつけずに、丹念に診て判断する必要があると、私自身も自戒をこめて思っています。

自殺についてですが、年間三万二千五百五十二人（二〇〇五年・警察庁統計による）ということですが、その背後には自殺未遂が十倍いると言われているので、三十万人以上の方が自殺という体験に直面しているということです。

これにも本当に多様な原因があり、先ほどの方も言われたように、うつ病や借金苦、病苦など

があります。自殺対策ということで法律ができたりして、例えば、地域の精神保健センターにその対策をつくらせようとしているようなところがあります。自殺する人は、みんなうつ病というような一元的な考え方があるかもしれませんね。そのあたりは、人間が自殺という究極の選択をする場合のさまざまな背景について丹念に分類、原因を考える、対策もどこかに丸投げというのではなくて全体としてやる必要があるかと思えます。

三万人というのは、国民全体の一億何千万人から見れば、ほんの一部かもしれませんが、その人たちだけの問題ではなくて、私たち社会全体がもっている問題であり、他人事ではないのだと受け止めなければと思います。いろいろな問題を自分の問題として引き受けて、みんな考えていかなければ、私たちはいつまでたっても、「あの人たちは気の毒だった」と、一部の人をスケープゴートのようにしてしまつて終わるのではないかという気がします。

山口 時間がきましたので、今日の講演会はこのあたりで終わりにしたいと思います。まだいろいろと香山さんに聞きたいことがあると思いますが、それは、これから香山さんが書くもの、話すことに皆さんが注目していただければと思います。

最後に感謝の拍手をお願いいたします。ありがとうございました。(拍手)



香山リカ（かやま・りか）

一九六〇年札幌市生まれ。東京医科大学卒業。精神科医、帝塚山学院大学人間文化学部人間学科教授。新聞・雑誌・TV等の各メディアで、豊富な臨床経験を生かした社会批評、文化批評、書評などを幅広く発信。現代人の“心の病”について洞察を続けている。著書に『ぶちナシヨナリズム症候群』（中公新書ラクレ）、『へ私』の愛国心』（ちくま新書）、『テレビの罠』（ちくま新書）、『老後がこわい』（講談社現代新書）、『四十歳からの心理学』（海竜社）、『多重化するリアル——心と社会の解離論』（ちくま文庫）、『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』（幻冬舎新書）ほか。

〈コーディネーター〉

山口二郎（やまぐち・じろう） 北海道大学公共政策大学院教授

刊行の言葉

日本社会を覆う改革の潮流の中で、大学も知の孤島から社会に開かれた知の拠点になるべきことは言うまでもありません。北海道大学大学院法学研究科附属高等教育研究センターも、二〇〇〇年四月の発足以来、社会科学の最先端の研究成果や各界の知的リーダーの叢智を社会にフィードバックすることを目指してきました。

二十一世紀に入り、日本は政治、教育、経済などあらゆる分野で混沌の度を深めています。改革という言葉は政治家の口からもマスメディアにも頻繁に語られています。何が改められるべき課題であり、どのような道筋をたどって改革を進めるべきかという基本的な部分で、議論が十分深められているとは言えません。

改革とは一握りのリーダーによって可能になるものではありません。広範な市民が同時代に存在する政策的課題を認識し、その解決に向けた基本的な理念を共有してこそ、時代は動いていくことができます。市民による同時代に対する認識を深めるための手がかりとして、ここにセンターブックレットを刊行します。

当センターは今まで、国政や地方政治の前線で活躍するリーダー、同時代の日本や世界を鋭く分析する作品を発表した研究者など、様々な方々をお招きし、知的触発の場を設けてきました。それらは、日ごろマスメディアでは伝えられないような生きた現実に関する体験的分析であったり、社会科学の研究の醍醐味を伝えてくれるものであったりします。こうしたゲストのお話が一度限りで消えてしまうのはもったいないことで、そうしたシンポジウムの記録を広く地域社会と共有するために、このブックレットは作られました。

今の日本では、効率優先、実利志向に基づく改革の中で、大学における社会科学の研究の意義が見失われかねないという現実があります。しかし、私たちが真に主権者として、社会の担い手として、自分たちの生きる国や地域社会のあり方を作り変えるためには、一見迅速であり、無益に見えても、政治や社会の課題について考え、議論するという作業を蓄積することが土台になるはずです。このブックレットを通して、大学のそのような活動について理解していただき、議論の広場に参加していただければ、幸いです。

二〇〇二年十一月三〇日

文部科学省科学研究費学術創成研究 14 GS0103
「グローバル化時代におけるガバナンスの変容に関する比較研究」

ACADEMIA JURIS BOOKLET 2006 No. 23

私たちが政治家を“好き”と思うとき

2007年3月28日 発行

著者——香山リカ

編者——北海道大学大学院法学研究科
附属高等法政教育研究センター

発行者——長谷川 晃

装幀——山本 健二

編集協力——(株)北海道新聞情報研究所

印刷・製本——(株)アイワード

Printed in Japan

ISBN 978-4-902066-22-7 C0031

©北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター